

論文審査の要旨

報告番号	甲・乙 第 3194 号	氏名	椿 美智博
論文審査担当者	主査 三村 洋美 副査 上條 由美 副査 山野 優子		
(論文審査の要旨)			
<p>本学位論文の研究目的は、臓器提供の選択肢提示が家族の行動を促すことにどのように影響をするのかを明らかにしており、明確である。救急の領域の臓器提供の最前線の取り組みについて検証を試みている点は新規性がある。いくつかの知見より適切なタイミングによる選択肢提示が臓器提供に関連する行動のきっかけにつながる可能性につながることを学術的位置づけから客観的に目的を導いている点も本研究の価値は高い。</p> <p>研究対象は三次救急で搬送され、1週間以内に亡くなった患者の家族である。本研究における介入とは在院時にアンケートを使用した臓器提供の選択肢提示である。介入の有無は来院した日付によって準無作為に決定されている。調査は在院時の「看護記録」、介入に使用した「アンケート」、死亡から8週後に行なった「郵送質問紙調査」で構成され、研究目的に対して適切な方法がとられている。分析は全体の分析を行った後に層化分析に進み適切に行われており、手順も具体的に説明されている。介入群は来院の日によって設定される点から倫理的配慮も十分され、研究の方法としては妥当である。</p> <p>選択肢提示の有 (51名:45.9%)、無 (60名:54.1%) で臓器提供に関連する行動に差はみられなかった。対象を層別にみると、患者が生産年齢(66.7%vs12.5%, $p=.04$)、家族が女性(24.1%vs3.1%, $p=.02$)、家族が混乱している(40.0%vs0.0%, $p=.004$)の3つで臓器提供の選択肢提示をすることで「家族の話し合い」が増加したという結果が明らかになった。結果は新規的であり、図表に分かりやすく表現されている。考察も今後の展望を含めて目的に対応して記載がされており、結果および考察は妥当である。</p> <p>アンケートが臓器提供に関連する行動を促す効果は限定的ではあるが、一部の家族において臓器提供に関連する行動を促していることが明確になり、本研究分野においては臨床現場に寄与する新たな知見である。この知見より、患者家族に対する丁寧な臓器提供の選択肢提示には段階的な介入が重要であり、アンケートを用いることが初期段階の対応として有効であるというように、独創的な結果より今後継続した研究のテーマに繋がっている。今後も本研究テーマで研究を発展させて、さらに人々の健康に寄与する知見を生み出すことができると考える。よって、博士(保健医療学)の学位に相当すると判定した。</p>			

(主査が記載)